

CenturyBooks

二葉亭四迷

福田 清 人
小 倉 脩 三

● 人と作品

清水書院



二葉亭四迷 ■

人と作品 18 350円

昭和41年10月30日 第1刷発行©

昭和44年4月20日 第2刷発行



検印省略

落丁本・乱丁本は
おとりかえます

- ・編著者.....^{ふくだきよと}福田清人／^{おぐらしゅうぞう}小倉脩三
 - ・発行者.....清水 幸雄
 - ・印刷所.....柳沢印刷所
 - ・発行所／清水書院／東京都新宿区東五軒町5
- Tel・東京(260) 5261～6 / 振替口座・東京5283
郵便番号 162

CenturyBooks

清水書院



二葉亭四迷

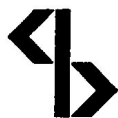
● 人と作品 ●

18

立教大学日本文学研究室

福田 清人

小倉 脩三



CenturyBooks

清水書院

原文引用の際、漢字については、
できるだけ当用漢字を使用した。

序

青春の日に、いろいろな業績を残した史上の人物の伝記、あるいはすぐれた文学作品に触れることは、精神形成に豊かなものを与えてくれる。

ことに苦難をのりこえて、美や真実を求めて生きた文学者の伝記は、強い感動をよぶものがあり、その作品の理解のためにも、大きな鍵を与えてくれるのである。

たまたま私は清水書院より、若い世代を対象とした近代作家の伝記及びその作品を解説する「人と作品」叢書の企画について相談を受けた。執筆者もできるだけ新人をということで、私が主任をしている立教大学の大学院に席をおきながら、近代文学を専攻している諸君を主として推薦することにした。そして私も編者として名前を連ねることになった責任上、その原稿には眼を通した。

こうして、その第一期九冊が出版されたのは一九六六年五月であったが、今ここにつづいてその第二期を出す運びとなった。

その中の一卷がこの「二葉亭四迷」である。執筆者小倉脩三君は成城大学から、立教大学大学院に入り、私の研究室にあり、すでに修士の学位をえて、現在博士課程で近代小説を研究中の篤学の士である。ここにわが近代小説の創始者ともいふべき二葉亭をとりあげ、政治か文学かの問題に苦悩しつつ真剣に生き、清新

な言文一致体を創始し、またそのすぐれた翻訳で近代文学に大きな影響を与えた二葉亭の生涯と、その作品を、平明に解説している。

二葉亭の生涯こそ、近代の小説家で最も波瀾にとんだ一人で、ここにもうかがわれるその真剣な生き方は若い人々に多大の感銘を与えるにちがいない。

私は過ぐる年、波荒いベンガル湾を航海し、その洋上で雄図空しく永眠した二葉亭のことを強くしのんだ日のこと、その前、シンガポールに寄港した折、二葉亭の眠るバセパンシャンの丘はどこであろうかと、デッキの上から祈りの気持ちをかめて、眺めていたことも、しみじみと思い出すのである。

立教大学日本文学研究室にて

福田 清 人

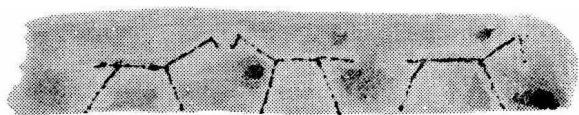
目次

第一編 二葉亭四迷の生涯

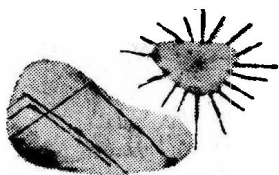
文学への眼覚め……………	八
野心と絶望……………	二三
青春彷徨……………	四〇
生活の嵐の中で……………	五〇
父の死……………	五三
ロシア行……………	六二
朝日新聞入社……………	七六
白夜の露都ぐらし……………	一〇一

第二編 作品と解説

浮雲	二〇
其面影	二八
平凡	一四五
翻訳および文学論	一六七
むすび	一七七
年譜	一七九
参考文献	一八四
さくいん	一八五



第一編
二葉亭四迷の生涯



文学への眼覚め

——軍人志望から文学へ——

二葉亭が自らに「くたばってしまえ！」と言い放って、ペンネームを「二葉亭四迷」とした、と言う話はよく知られている。四十六歳の生涯において彼がのこした小説は処女作『浮雲』をはじめとしてわずかに三編、他に二十数編の翻訳と数編の文学論があるのみである。しかもその間には幾度も文学を放棄し、後半生は、自分が文学の世界に足をふみ入れたことを若気のあやまちとして何よりも後悔した。

しかし、その業績の、文学史上にのこる価値は非常に大きく、現在、彼が近代文学の最も偉大な先駆者の一人であることを疑うものはいない。

彼の波瀾おい生涯をたどりながら、その業績と、その業績の背後にある、明治の一知識人としての二葉亭の人間的苦悩にふれてゆきたいと思う。

下級武士の生まれ

二葉亭四迷、本名長谷川辰之助は、元治元年（一八六四）二月二十八日、江戸市ガ谷合羽坂の尾州藩上屋敷で生まれた。

父吉数は、尾州藩の下級武士であったが、特に御鷹場吟味役として江戸づめを命じられていた。それは、藩



父
主の鷹狩^{たかがり}にお伴する小姓という役目である。吉数は、その美男をかわれて、その職にとりたてられたといわれている。二葉亭の生まれた元治元年という年は、明治元年から逆算すると四年前で、倒幕運動の幕あけともいふべき藤田小四郎の筑波山拳兵、イギリス・フランス・アメリカ・オランダ四国連

合艦隊の下関砲撃、第一回長州征伐とあいついだ事件がおこるというように、内外両面、維新にむかって、風雲急をづげる情勢であった。しかし、二葉亭の生まれた尾州藩上屋敷は、そういう緊迫^{きんぱく}した情勢とはおよそ無縁で、晩飯のあと、母志津が三味線をひけば、父吉数がほろよいきげんで常盤津をうたうという、いわゆる江戸末期の御家人^{ごけいじん}風の呑気な生活であったといわれている。

母
のちの二葉亭は武士の出らしい潔癖な気骨がある反面、俗曲をたしなんだりする遊び人で、その適度の融合が彼の文学の一つの特質であるが、それは幼時のこうした生活環境と無関係ではない。

ということもあつた。そういう動乱の空氣に触れたことは、後に彼が国家問題や政治問題に関心を持つ原因になつたと、彼自身述懐じゆつかいしている。

一方、父吉数は、尾州藩が親藩であつたけれども早くから勤王派きんのうはであつたためもあり、維新に際して特に危害もうけず、むしろ日頃の如才のなさど仕事上手が認められて、明治元年十一月には、東京御留守居調役に任ぜられ昇給している。御留守居調役というのは、一種の藩の会計役である。

漢学

明治元年十一月、諸藩の江戸屋敷引払いとなり、吉数は東京御留守居役調に任ぜられたのであるが、それと一緒に、二葉亭と母、祖母家族のものは、父だけを江戸に残して名古屋へ引きあげることになった。江戸市中は相変わらず物騒であつたから疎開したわけである。

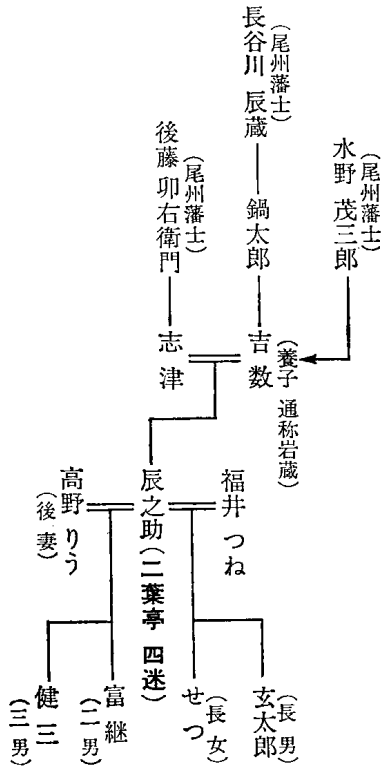
名古屋で彼は、初めて学問を習いはじめた。漢学塾に入る一方、叔父によって漢文の素読すどくなど、武士的教育がなされた。彼自身後に、

「儒教の感化をも余程蒙こうせうつた。(中略)一寸、一例を挙げれば、先生の講義を聴く時に私は両手を突かないぢや聴かなんだものだ。これは先生の人格よりか『道』その物に対して敬意を払つたので。かういふ宗教的傾向哲学的傾向は私には早くからあつた。」

(『予が半生の懺悔』)

と書いているようにこの漢学は、彼に大きな影響を与えるところとなつた。

長谷川家の家系図



いものだね、今日までも掌が瘤々だ。そして其頃の僕の第一の愉快といふのが、盛んに撲り合つて、じつとり汗になつて、体中がポカ／＼するやうになつた処で、道具を脱るとかう竹刀を斜に構へてチンテンツンと口三味線か何かで、淨瑠璃や唄を唸るのだ。ハハ、、これが第一の愉快だつた。」

〔『酒余茶間』〕

と記されていることから想像される。

また、武士の子供らしく剣道も習っている。しかし、ここになされた教育がまったく武士的で堅苦しいものであったかといえ、必ずしもそうではなく、かなりゆるやかなものであったことは、たとえば、

「十四五位で盛んに撃剣をやつたさ。ひど

我がまま

『平凡』の一節に、

「兎に角祖母は此通り気難かし家であつたが、その気難かし家の、死んだ後迄噂に残る程の祖母が、如何いふものだか、私に掛ると、から意久地がなかつた。

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだか、其は私には分らなかつた。が兎に角意久地が無くなるのは事実で、評判の気難かし家が、如何にでも私の思ふ様になつて了ふ。

まず何か欲しい物がある。それも無いものねだりで、有る結構な干菓子^かは厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強要^{ねだ}るが許されない。祖母に強要る、一寸洩る、首玉^かへ嚙^かり付いて、よう／＼と二三度鼻声で甘垂れる、と、もう祖母は海鼠^{なまこ}の様になつて、お由^{よし}——母の名だ——彼様^{あんな}に言ふもんだから、買つて来てお遣りよ、といふ。」

とあるが、一人っ子で父がおらず、祖母と母を交えた彼の名古屋での生活は、これに類似して、かなり我がまましほうだいのものであつたと思われる。彼自身も幼年時代をふりかえつて、外に出ると臆病であつたけれども、家人に対してはわんぱくを極めた。毎朝母に衣服を着せてもらったが、いつも一度ではすまず、気に入らなければ二度でも三度でも着かえさせてもらうというように、だだをこねて母を苦しめ、「概して云ば当時予の心状は卑劣なりしなり」(『自伝第二』)と述懐している。

また八歳のとき、名古屋藩学校に入学し、翌年には東京に帰つたため、わずか一年ではあるが、英語とフランス語を習った。維新になつても、明治四年の廃藩置県までは藩が存続し、各藩の教育機関として藩学校

があり、進歩的な藩では、外国語教育が取り入れられていたのである。

軍人志願

名古屋より東京へ帰った二葉亭は、明治八年、父が島根県吏^りとなったため、再び東京を離れ松江^{まつえ}に行き、ここで十一歳から十四歳までの三年間をすごした。その間、内村友輔^{すけ}の相長舎^{そうちやうしや}と松江変則^{へんそく}中学校に学んでいる。内村友輔は昌平黌^{しやうへいこう}出身の儒学者であり、二葉亭は相長舎^{そうちやうしや}において漢学を、松江変則中学校において英語を中心とするヨーロッパの学問を学んだ。当時は一方では漢学を学び、他方ではヨーロッパの学問を学ぶという二重性は、ごく一般的であり、夏目漱石や森鷗外も同様であった。そして漢学の下地は、彼等の人格をつくる上で非常に大きな比重をしめている。二葉亭におけるその影響は、彼の告白として前にふれたとおりである。

松江時代の二葉亭は、地方では目立つような都会風のハイカラな身なりの、華奢^{きゃしゃ}な男であったといわれている。父の同僚の話すところによれば、それでも持てあまし気味の茶目であり、二葉亭自身友人の内田魯庵^{ろあん}に語ったところによれば、

「陸軍大將を終生の希望とし乱暴して放屁するのを豪いやうに思つてゐた」(内田魯庵「おもひ出す人々」)

また、二葉亭の伯父は、西南の役に召集されて戦った人であるが、西郷びいきの二葉亭はその伯父が官軍

★ 変則中学校 明治五年の学制でヨーロッパにならって小・中学校が作られその教科課程が規定されたが、それが理想的すぎて実状にそぐわず、特に地方などで規定外の小・中学校が作られた。そのひとつが変則とよばれるものである。

だということが気に入らないで、たびたび議論をしかけ困らせたといわれている。

外国語学校

明治十一年、十四歳のとき、二葉亭は上京、四谷の親戚の家に寄食した。陸軍士官学校受験のためである。彼は、愛宕下の高谷塾に入塾した。この頃より、それまでのやんちゃとうってかわって、にわかになじめに勉強するようになったといわれている。

しかし残念ながら、彼は、三たび陸軍士官学校を受験しながら、失敗におわった。原因は強度の近視によるものであった。肉体的欠陥が、その原因とすれば、駄目なことはほほわかっていたはずである。にもかかわらず、三度も受験をこころみたことは不思議であるが、彼の軍人になりたいという志の強さと、一徹な性格を物語っているともいえよう。

明治十四年、十七歳のとき、彼はついに士官学校をあきらめ、外国語学校のロシア語科を受験した。ロシア語を選んだ理由は、当時特に、ロシア語科に、中国語・韓国語とならんで官費制度（全員が寄宿舎に入り、すべての経費を国が負担する制度）が設けられていたためもあったが、二葉亭の場合単にそのみではなく、国家の大事は将来必ず日本——ロシア間にあり、そこで活躍することが、軍人にかわる道としては、最も国家のためになり働きがいのある仕事と考えたためであった。彼は『予が半生の懺悔』の中で次のように書いている。

「そこでと、第一になぜ私が文学好きなどになつたかといふ問題だが、それには先づロシア語を学んだい